

比較言語学・遠隔系統論・多角比較

——大野教授の反論を読んで

長 田 俊 樹

1. はじめに

大野晋教授が『新版 日本語の起源』（岩波新書）を出版したのは1994年6月のことである。その本の出版をきに、大野教授をおまねきして、国際日本文化研究センターで、『日本語の起源について —大野晋教授のタミル語起源説をめぐる—』と題してシンポジウムを開催した。その後、シンポジウムにおける家本・児玉・山下・長田の諸論をまとめ、『日本研究』第13集に掲載したところ、さっそく大野教授から反論が提出された（『日本研究』第15集248-186頁）。この反論は紙数の都合により、山下・長田にたいしてのみおこなわれ、家本・児玉にたいする反論は後日おこなわれるという。なお、校正の段階で、『国文学 解釈と鑑賞』誌で、児玉・家本への反論が開始されたことをした。

この反論を読んだ率直な感想をのべておこう。まずなんといっても、喜寿をむかえられた大野教授の闘志あふれる元気さに驚嘆した。りっぱな業績をあげた老大家が、四〇歳前後の若輩者に、これほど情熱的に自説を展開される態度には敬服するばかりである。筆者が喜寿まで存命したとしても、大野教授に匹敵する業績をあげることができるとはおもわないが、せめて大野教授のこうした態度はぜひみならいたいとおもう。

情熱的に自説を展開するのと裏腹に、あちらこちらにフェアーでない論点もみえる。たとえば、「当日の議論では大野教授に軍配が上がったと認めざるをえない。」という長田（1996：247）の発言をとらえ、「〔2〕研究と論争の勝敗」とわざわざ項目をあげて、「勝ちとか負けとか考えたのでは、透明であるべき真実の認識が曇るだろう」（244頁：以下、大野教授の反論からの引用は頁数だけをしめす）と批判している。また、「譲歩」ということばもやり玉にあげられている（234頁）。これらは「日本語＝タミル語同系論」と直接は関係がない。いわば人生訓や研究姿勢の問題である。それを大野教授は研究姿勢がよくないものは真理にはちかづけないといわんばかりである。これをひとは老獪とよぶ。こうした生産的ではないあげあしよりは一般の読者にたいしてならまだしも、研究論文としてはふさわしくない。すくなくとも筆者はそうおもう。

大野教授の反論に対し、再反論をこころみるのはひとえに大野教授のアンフェアーな態度による。とくに、山下氏からは大野教授は論点をすりかえているので、ぜひ再反論させてほしいとの依頼をうけた。筆者は山下氏のタミル語の古代から現代までの知識と学識をたいへん評価している。したがって、再反論の機会をぜひつくりたいとかがえてきた。さいわい、もう一度『日本研究』誌上で、再反論を展開する機会をえた。ここでひとこと、機会をあ

えてくださった『日本研究』編集委員の皆様へ感謝したい。

この再反論にあたって、筆者はすこしでも生産的な方向へ論が展開するように、山下氏には大野教授の説と山下氏の説との相違点がはっきりわかるようにという注文をだした。また、この論争をしかけた（真理を追求するのにしかけるとはなにごとか、と大野教授に叱責されそうだが）長田も責任をはたすため、再反論を用意した。タミル語については山下氏に全面的にまかし、筆者は比較言語学の最近の動向を中心にのべようとおもう。大野教授は最近の比較言語学の成果に関心がないように、筆者にはみえる。じつは、最近の成果は大野教授の説とふかくかかわっている。「タミル人渡來說・タミル語伝播説」を放棄すれば、こうした成果は大野教授に有利にはたらいっていると、十分にかんがえうる。また、大野教授は自説の展開にすべてをかけているせいか、最近の日本語系統論の動向に注意をはらっていないようにおもう。そこで、日本語＝タミル語同系説が提出された1980年以降の日本語系統論の動向をしるために、1980年以降に欧文でかかれた日本語系統論文献一覧を付録として掲載する。

あたらしい説をうちたてるのはとてもむずかしい。新説はある側面は説明できるけど、まだまだ説明できない点がどうしてもでてくる。ところが、大野教授の仮説は説明できる点、つまり仮説に都合のいいところだけを強調しているので、どうしても胡散臭くみえてしまう。誤謬なき仮説は信仰にひとしい。筆者がどうしても理解できないのは、比較言語学とは関係のないと大野教授もみとめている「タミル人渡來說」になぜ固執するのか、という点につきる。考古学を援用して、「タミル人渡來說」を展開しているといいつつ、考古学者との共同研究には着手しない。むしろ、考古学者にかなりはげしく批判をくわえている。あの旧版『日本語の起源』を執筆した同一人物とはおもえないのだ。

筆者がこれからのべることは大野説と直接かかわらない点もある。そこで論点がぼけないために、筆者の結論だけをのべておきたい。大野教授の日本語とタミル語同系説を、生産的に評価するために、つぎのことを提案したい。

(1) タミル語と日本語の音韻対応について、Zvebil がいうように、「ドラヴィダ語＝ウラル・アルタイ語同系論」あるいは「ノストラティック大語族」のわくぐみでとらえてはどうか。こうしたわくぐみで論じるならば、こまかい音韻対応の例については問題がのこるものの、今後いっさい大野説に口をはさまないことを宣言する。ただし、誤解がないようにいえば比較言語学の基本的な考え方に疑問がのこるので、大野説に口をはさまないだけであって、支持することはない。

(2) 「タミル人渡來說」についてはいっさいを考古学者の手にゆだねて、この説によって解決できる問題と解決できない問題をあきらかにしてもらってはどうか。「考古学の素人」(241頁)と大野教授が自認している以上、考古学者の言動は尊重されるべきであろう。

この提案は大野教授のこれまでの努力を最大限にいかすものであるとしんじている。水かけ論になって、泥沼にはいる気はさらさらしない。筆者はむしろこの再反論が大野教授の仮説をいかすものとなることをいのっている。比較言語学の最近の成果と大野説はけっして矛盾しない。これからその点をくわしくのべてみたい。

小論の構成をのべておこう。まず、大野教授のアンフェアな態度が気にかかるので、そ

の点をのべる。そして、比較言語学の最近の研究成果をとりあげる。まず、再建（再構 Reconstruction）についてのべたあと、「ドラヴィダ語族 = ウラル・アルタイ語族同系論」のような遠隔系統論についてのべる。さいごに、大野教授がおこなうような考古学や遺伝学の成果をとりくんだ言語比較にふれる。それを多角比較とよぶが、とくにグリーンバーグの仕事を取りあげる。

2. 大野教授の反論のアンフェアな点

大野教授の反論がアンフェアであることはうえてふれた。しかし、勝敗や譲歩うんぬんについてはわらってすまうことができる。こうしたあげあしとりにはわらってすまうとしても、学問的にアンフェアな点だけはここでとりあげないわけにはいかない。それはつぎの二点である。まず、Zvelebil の説と大野教授の説の相違をとわず、あたかも一致するかのよう論じている点と、筆者があげた反証を、かってに曲解し、あたかも筆者におちどがあるように指摘した点、の二つである。では、その具体的な点をのべておこう。

(1) Zvelebil 説と大野説の相違点

筆者は大野教授の「日本語 = タミル語同系説」を全面的に否定するものではない。それどころか、時代をさかのぼっていけば日本語とタミル語がおなじ起源をもつ可能性はけっしてちいさくないとおもう。ただし「タミル語伝播説」はいただけない。この「タミル語伝播説」と「ドラヴィダ語族 = ウラル・アルタイ語族同系説」のわくぐみのなかでの日本語とタミル語の系統関係を同一視してはならない。じつは、大野教授が大野説に好意的であると紹介する Zvelebil 教授はこの後者の立場にたつ。

大野教授は今回の反論を Zvelebil の論評の紹介からはじめている。その論評は『シンボジウム弥生文化と日本語』（角川書店）に下宮忠雄訳で掲載されている。大野教授は今回もその下宮訳を長々と引用しているが、じつはその英語の原文が *Archív Orientální* 誌に掲載されている (Zvelebil 1991a)。ところが、その Zvelebil (1991a) と下宮訳をてらしあわせると、重大な欠落がある。それは「タミル語伝播説」を否定する箇所である。引用がながくなるが、その箇所を英文と下宮訳の両方をあげる。

“However, given the nature of the evidence, and the historical possibilities, and the probable time-depth involved, straightforward borrowing is, to my mind, ruled out, too, although, it seems, this is what S. Ohno himself would at present (1989) have rather in mind positing hypothetical searoute contracts in late prehistoric-early protohistoric period.” (Zvelebil 1991a: 75)

「しかしながら、証拠の性質、さらに歴史的な（不）可能性、さらにそれに伴う時の深さを考えると、直接の借用も除外されると私は考えます。」（ズヴェレビル1990下宮訳）

引用をみじかくするために文脈をのぞいたが、ドラヴィダ語と日本語の類似性をどう解釈するかをろんじるなかで、直接の借用についてのべている文章である。二つをくらべていただきたい。うえの英文から、although 以下がない。つまり「大野教授自身は縄文晩期あるいは弥生早期における、仮説的な海路による契約 (contract は contact 接触の誤りか) を考えておられるようだが、【以下、下宮訳につづく】そうした直接の借用も除外されると私は考えます」という一文がないのだ。訳者が原文からその部分を訳さなかったのか、Zvelebil が Archív Orientální 掲載時に although 以下をくわえたのか、筆者はしるすべもない。こうしたアンフェアさは大野教授の意思ではないとしんじたい。隠蔽工作があったかどうかはべつにして、これからあきらかなことはズヴェレビル教授は大野教授の「タミル語伝播説」をはっきりと否定している、ということである。

さらに、大野教授は Zvelebil の「タミル語伝播説」の否定を問題にしないばかりか、今回の反論のなかでも、Zvelebil の論評紹介といいながらも、かってにドラヴィダ語をタミル語によみかえている。たとえば、「彼は (= Zvelebil : 筆者注) 日本語とタミル語との系統関係の諸相をいくつか模索した後」(245頁)とか、「同教授は日本語とタミル語の系統関係には、力と熱意、想像力、大胆さ、忍耐、厳格さが必要であることを指摘し」(245頁)と大野教授はズヴェレビル教授の論評を要約しているが、ここでズヴェレビル教授がいつているのは「タミル語」ではなく「ドラヴィダ語」である。

こうした基本的立場がことなるばかりでなく、方法論についても、両者の立場はことなる。ズヴェレビル教授は、大野教授が引用した論評のなかでこうのべている。

「私の考えでは、この種の比較研究において最も合法的な方法は、比較して再構されたドラヴィダ祖語 (Proto-Dravidian) と古代日本語 (との比較【原文 (Zvelebil 1991a) には as compared with ancient Japanese とあるので、この句を補足すべきである】) を考慮に入れることです」(下宮訳175頁)。

一方、大野教授は『新版日本語の起源』のなかで、こうのべている。

「学者によっては『ドラヴィダ語の祖形を用いて比較する』などという。しかし『祖形』とは、すでにヨーロッパの言語学者がいうように、個々の研究者の作り出すフィクションにすぎない。—— (中略) ——

こうした実際的な手続きの上の困難を知るものは、何千キロ離れた言語を『語族』という単位で扱い、その助詞・助動詞の対応を立証することが、むしろ絶望的に近いほど難しいだろうということを予測する。

つまり、比較の対象として『語族』を取り上げることは決して適切ではない。むしろ誤謬に近い」(33頁)

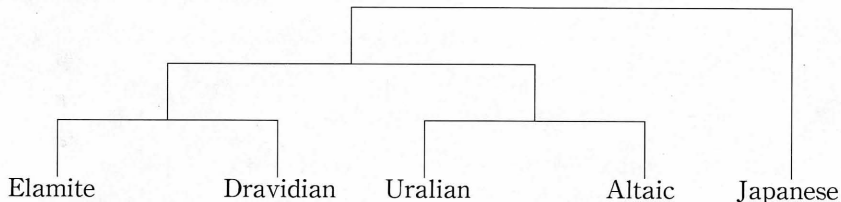
ドラヴィダ祖語と古代日本語の比較がもっとも合法的な方法とズヴェレビル教授はかんが

える。これに対し、祖形などはフィクションにすぎず、語族をとりあげることは誤謬にちか
いと大野教授はいう。このちがいはあきらかである。ところが、大野教授はこの相違点をま
ったく無視している。そして、「ドラヴィダ語」を「タミル語」といつわって、ズヴェレビ
ルの論評を紹介する。これはまったくアンフェアである。

筆者は基本的にはズヴェレビル教授と同意見である。筆者はタミル語をよくしらない。し
たがって、日本語とタミル語の音韻対応の語例をくわしくとりあげたりしないし、家本・児
玉・山下各氏のようなタミル語をよくした研究者にまかせたいとおもっている。また、大
野教授はなにか誤解しているようだが、筆者は日本語とタミル語のなにかしらの系統関係
をけって否定していない。むしろ、大野教授のタミル語と日本語の系統関係をさぐる努力に
ついては賞賛されこそすれ、けって無視すべきものではないとかがえている。したがっ
て、大野教授をおまねきしてシンポジウムを開催したし、こうして論争にも参加している。
しかし、ドラヴィダ語を視野にいれないことと「タミル語伝播説」には異論がある。ただそ
れだけのことだ。うえでみたように、この二点はズヴェレビル教授も論評のなかで指摘して
いる。つまり、筆者はズヴェレビル教授とおなじ立場なのである。

では、なぜ筆者はアンフェアな態度で反論をうけ、ズヴェレビル教授は大野教授の支持
者とみられ、好意的にうけとめられるのか。たぶん、筆者が否定的な側面を強調しすぎるの
であろう。また、筆者が国際的なドラヴィダ学者でないことも事実だ。しかし、これからは
ズヴェレビル教授を利用するのは「タミル語伝播説」を廃棄し、ドラヴィダ語やアルタイ語
を視野にいれてからにしてほしいと、要望しておきたい。

なお、ズヴェレビル教授がかがえておられる系統関係を図示しておく (Zvelebil 1991b)。
大野教授との相違がかんたんに理解できるはずである。



(2) 筆者の指摘を見落としとよみかえた点

うえにあげたアンフェアな例は直接筆者とはかかわらない。しかし、つぎにあげる例は
筆者に直接かかわる。それは筆者の指摘をかってによみかえてしまった点である。

筆者は前回、家本・児玉・山下・長田の論文をまとめるかたちで、「序」をかいた。その
「序」の Appendix として、大野教授の「タミル語：日本語対応語一覧表」の問題点をあげ
た。筆者があげた六つの問題点のなかで、「(5)ドラヴィダ語語源辞典(第二版)(DEDR)を
多く引用しているが、DEDRの意味と異なった意味を対応例としてあげたケース」(長田
1996:244)として六語例を指摘した。筆者はDEDRにないことを指摘したかっただけで、
それ以上でも以下でもない。だから、わざわざ「客観的と思われる事実のみをあげておく」

(長田1996:244) とことわっておいた。

ところが、大野教授の反論はつぎのようなものである。

「では長田氏の指摘による『DEDR にない訳語による6個』が、大野の恣意的な捏造あるいは変形などであるかどうか点検してみることにする。

その結果をあらかじめ概括すると、長田氏は DEDR のタミル語の部分が、TL からの抜粋であることを御存じなかった。

その結果、大野が、『辞典にない意味』を使ったと発言をなされた。大野の用いた『DEDR にはない訳語』はたしかに DEDR にはない。しかしそれらは DEDR の親本である TL にはある。大野が『作り出した意味』はなかった」(232頁)

まず、ここでだいじな点は筆者が指摘した DEDR にはないことは大野教授もみとめていることだ。しかし、大野教授はなにをおもったのか、つぎのように結論づけている。

「長田氏はこれらの DEDR にはない訳語が、あたかも作為・捏造・逸脱であるような言い方をなさっている。しかし DEDR はタミル語については TL からの抜粋本にすぎない。DEDR の序文に『使用した多くの辞書は時に冗長で、同じ単語について多くの同意語をあげているので、経済の観点からいくらかの刈り込みが必要だった。この作業によって失われたものがある』とある。そのような見地から省略された意味のなかに、日本語と対応するものが実際には少なからず見出される」(230頁)

さらにあきれたのは「すでに述べたように長田氏の異議ある語例の6例中5例は長田氏の見落としによるものであった」(226頁)とまで、のべていることである。DEDR にはないという「客観的」指摘が「あたかも作為・捏造・逸脱であるような言い方」となり、最終的には長田の「見落とし」となる。こんな反論はアンフェアをとおりこして、犯罪的とすらおもえる。こうした論法をくりかえしていると、大野教授の名声に傷がつく。

人間はだれしもまちがいをおかす。しかし、そのまちがいをみとめるのは勇気がいる。この場合、「DEDR にはない意味を TL から引用したものもある」と、ひとこといえずむことを、なぜ長田の「見落とし」と断定し、自分のまちがいを他人のせいにするのか。

この大野教授の反論には長田の「見落とし」と転嫁させた以外にも、重大なまちがいがあがある。それは DEDR の序文の大野教授による訳文である。うえに引用した大野教授の反論(230頁)のうち、下線部はつぎの英文の訳文である。

“The dictionaries have at times been so verbose or have given so many synonyms for the same word that in the interest of economy some pruning has been necessary. It is thought that nothing essential has been lost by this practice, (or by an arrangement of items that allowed identical meanings to be represented by ‘id.’)” (DEDR p. xxi)

大野教授の訳文は括弧以下をのぞいた部分である。さいしょの文の訳には問題はない。つぎの It is 以下が問題で、大野教授は「この作業によって失われたものがある」と訳している。これはあきらかに誤訳である。しかも意味はまったく正反対になる。この英文の意味は「この実行によって、本質的なものはまったく失われないという考えに基づいている」という訳でおおきなまちがいなからう。つまり、本質的な意味は「失われない」と DEDR の序文で指摘しているのに、大野教授は誤訳したうえで、「失われたものがある」とのべる。そして、これを根拠に「省略された意味のなかに、日本語と対応するものが実際には少なからず見出される」(230頁)として、TL を積極的に利用することを正当化している。しかし、DEDR では「失われない」といっているので、その根拠はまったくなくなってしまう。

DEDR にはながいドラヴィダ言語学の蓄積がある。その DEDR が TL のなかの意味を選択するにはそれなりの意味があるとかんがえるのがふつうだ。より真理を追究する科学的な態度をつらぬきたいというのであれば、長田の「見落とし」として責任転嫁するのではなく、DEDR の編者(パロー教授は亡くなったが、エメノー教授はご存命である)に、大野教授が TL から引用した意味を DEDR に掲載してもらうように、手紙をかくなり、論文をかくのが筋道のようにおもうが、どうだろうか。

以上、うえにあげたアンフェアな態度はかなり本質的なものをふくんでいる。筆者のような若造がこんなアンフェアなことをやったら、たぶん学者生命をたたれてしまうだろう。ズヴェレビル教授を自説の正当化に利用するのは筆者が大目にみたとしても、事実を的確につたえれば、ズヴェレビル教授自身がだまっていないうらう。また、筆者の指摘を「見落とし」といいかえてしまったのは、長田みたいな若輩者にはこれで十分だということなのだろうか。ずいぶんあまくみられたものである。

大野教授がいかにアンフェアであろうと、「タミル語伝播説」が否定されようと、日本語とドラヴィダ語が類似するという事実はわからない。また、それを歴史的にむすびつけようとするころみもある。そうした研究を中心に、4章・5章で紹介してみたい。そのまえに、大野教授の再建、ひいては比較言語学についての知見には重大なあやまりがあるので、それを次章でのべる。

3. 比較言語学と再建

まず、大野教授の比較言語学、とりわけ再建にかんするかんがえ方をみておこう。山下氏の「ドラヴィダ語の祖語形」という発言をとらえて、つぎのように大野教授が反論している。

「しかし実は比較言語学ですでに明らかになっているように『祖形とは fiction』なのである。同系に属するという具体的な言語 A, B, C, D…の古形にさかのぼり、さらに文献以前に祖形 X なるものが存在したとする。それが、くだって A, B, C, D, …という具体的な古形に至ったのだから、その X は A, B, C, D, …という現実形を派生しうる A', B', C', D', …という要

素をすでに含んでいたと見なくてはならぬと考え、それらをふまえて祖形 X を再建する。だから、たいていの場合、祖形とされる X という音形は、かなり複雑な形をしている。しかしそんな形が実在したのか。誰もそれを立証することはできない。『再建形』なるものは、学者それぞれの意見によって相違する。それは fiction だからである。再建という作業は各言語に渡る綿密な実証の結果をふまえて行われるにもかかわらず、それは架空の“祖形”を生み出すのである」(222頁)

大野教授はこう指摘したのち、「比較研究は『祖語形』から出発するものとするのは山下氏の謬見であることをまず明らかにしておく」(222頁)と断言している。

さいしょに、つぎのことをことわっておく。筆者がこれから指摘することは比較言語学における再建のとりあつかいであり、筆者自身がかんがえたものではない。比較言語学の方法論によると、大野教授のうへの論点はあやまりである。では、なにがあやまっているのか。おおきくいえば、二つある。まず、比較言語学は再建形を fiction とはみていないこと。そして、大野教授は再建形は fiction だからといって再建形自体を否定しているが、再建形を否定した比較言語学は筆者のしるかぎり存在しないこと、の二つである。

じつは比較言語学において、再建形をどうとらえるかについて、二つの解釈がある。一つは实在主義者 (realist) とよばれ、もう一つは換算主義者 (reductionist; Hock 1986: 570) とか、公式主義者 (formulaist; Anttila 1989: 341, Fox 1995: 9, Durie & Ross 1996: 12) とか、慣例主義者 (conventionalist; Lass 1993: 157) とかよばれる。後者の名称はかならずしも一致しないが、おなじことをいっている。それはつぎのことをさす。实在主義者は、再建によってあらわされる記号が祖語の音韻をしめし、その音韻は実際の調音点をしめしているとかんがえる。一方、換算・公式・慣例主義者は再建によってあらわされる記号はたんに音韻対応を網羅する記号とみなす。従来は後者の解釈が有力であったが、さいきんではむしろ实在論にたっている。

この二つの解釈については、Fox (1995: 10) の説明がわかりやすい。実際の例をあげて、比較言語学者のおおくは实在論にたっていることを説明している。つぎの例は《父》を意味する印欧諸語の音韻対応である。

ラテン語	ギリシャ語	サンスクリット語	古高地ドイツ語
pater	patɛ:r	pita:	fater

この音韻対応から、印欧祖語 *patɛ:r と祖形をたてている。もし、この形をたんなる記号とみるならば、*p♥te:r とたてることも可能である。ところが、この形では発音もできないし、*ə>a, i といった音韻変化も想定できない。とくに、音韻変化はこれまで実在した音韻変化をもとに祖形がたてられるので、この点でどうしても实在論者の立場をとらざるをえない、と説明する。

また、Hock & Joseph (1996: 532) は实在論がいかにかたしいか、Hall (1960) の研究を

紹介して、つぎのようにのべている。⁽²⁾ Hall はロマンス諸語からの再建形とラテン語の語形をくらべた結果、ロマンス諸語から再建された音韻対立がラテン語の長短の対立とほぼ一致していることを発見したが、これこそが再建形が実在することをしめし、けっして学者の想像の産物ではないことをあきらかにしている、と指摘する。

さらに、この二つの解釈をめぐる論争について、Anttila (1989: 341) はこうのべて、実在論者側が勝利をおさめたと結論づけている。

“As in so many other linguistic controversies, the truth lies most of the time between the two poles. Actually the positivist (realist) side wins clearly over the negativist (formulaist) ; indeed, many of those linguists who maintain a negativist position in theory are actually positivists in practice”

以上、さいきん出版された再建についての教科書 (Fox 1995)、再建や比較方法をあつかった歴史言語学の教科書 (Anttila 1989, Hock 1986, Hock & Joseph 1996)、および専門書のなかの論文 (Lass 1993, Ross & Durie 1996) を参照した。その結果、多少のニュアンスの差はあるものの、そのすべてが実在論にたつてかんがえるべきであることを指摘している。⁽³⁾

大野教授は比較言語学者ではなく、国語学者である。比較言語学についてかたるときにはそれなりに慎重になるべきであろう。さもなければ、やけどを負う。「実は比較言語学ですでに明らかになっているように『祖形とは fiction』なのである」という大野教授の指摘こそが、皮肉にも fiction なのである。

大野教授の説明はこまかくみると、おかしな点がめだつ。A, B, C, D, … というのは言語をさすのか、それぞれの対応語をさすのか、よくわからないし、A', B', C', D' … はなにをさすのか不明だ。また、「祖形とされる X という音形は、かなり複雑な形をしている。そんな形が実在したのか」というのも素人ですと宣言しているようなものである。祖形は通常国際音声字母で表記されており、たとえ二重調音など複雑な形をしていても発音できるのがふつうである。こんな発言を聞くと、大野教授は音声学をやったことがあるのかしらと心配になる。⁽⁴⁾

もう一つだいじなことは、メイエやイエスベルセンなどの公式主義者たちも、再建形自体を否定してはいないということである。再建形が実在する音ではなく、たんなる公式からあみだされた記号にすぎないとかんがえるのと、再建形をあたまたから否定するのはおおきな差がある。どうも大野教授の立場は後者らしい。再建形を否定した比較言語学などは1990年代半ばすぎの現在、筆者のしる範囲では存在しない。したがって、大野教授が後者の立場をとりつつけるのであれば、「比較言語学では」といわず、「大野流比較言語学では」とか、「大野言語学では」というべきであろう。

ずいぶんときびしいことをのべた。しかし、なんともいうように、それでもドラヴィダ語と日本語の類似は存在する。大野教授の方法論的なまちがいはなおせばすむ。歴史言語学の教科書をよめばわかる。そして、大野教授の研究をたんなる空想の産物として、すてさるのではなく、大野教授の研究を十分再評価できる可能性があるのではないか。つまり、さいご

にのこった日本語とドラヴィダ語の類似については、ズヴェレビル教授のように、遠隔系統関係を想定することで解決できるのではないか。その方向での出口をさぐってみたい。そこで、次章ではこの遠隔系統関係を中心にのべる。

4. 遠隔系統関係⁽⁶⁾

言語の系統関係の樹立はインド・ヨーロッパ（印欧）語族を手本とする。そして印欧語族以外にも、これまでの研究によってあるていど確立した系統関係がある。たとえば、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族、アフロ・アジア語族など。さいきん、こうしたすでに確立した語族同士の系統関係がよく問題になる。これを遠隔系統関係（distance genetic relationships）とよぶ。

まずさいしょに、遠隔系統関係としていま一番注目をあつめている「ノストラティック大語族」⁽⁷⁾についてのべてみたい。「ノストラティック」の名称はラテン語のつぎのことばにもとづく。nostrās ‘our countrymen’。またこの名称はデンマークのペデルセンが提唱したものである（Pedersen 1903: 560）。しかし、こんにち、ノストラティックの名をたかめたのはロシアのイリッチ・スヴィティチ（1934-1966）⁽⁸⁾である。彼の死後、「ノストラティック語源辞典」が三回にわけ（1971、1977、1984）出版され、Shevoroshkin ed. (1990: 136-167) が重要な部分を英訳している。彼の提唱するノストラティック語族とはつぎの語族からなる。印欧語、アフロ・アジア語、ウラル語、カルトヴェリ語、ドラヴィダ語、アルタイ語の六つである。その語源辞書には700語以上の対応語彙が掲載されている。しかし、ロシア語でかかれていたことやソ連の社会主義膨張政策との関連をうたがわれて、西側にはまったくうけいれられな⁽⁹⁾かった。げんに、八〇年代後半から九〇年代にかけて出版された日本の『言語学大辞典』（亀井・河野・千野編。1986-1995）やオックスフォード大学出版の国際言語学百科事典（Bright ed. 1992）、ルートリッジ社の言語学辞典（Bussmann ed. 1996）にはこの「ノストラティック語族」は登場しない。

ところが、Shevoroshkin & Markey ed. (1986), Kaiser & Shevoroshkin (1988), Shevoroshkin ed. (1989, 1990) など、英文で紹介されるようになると、ロシア以外にもかなり注目されるようになってきた。とくに、アメリカでは、つぎにのべるグリーンバーグの研究とともに、『ニューヨーク・タイムズ』（Wilford 1987）や『US ニュース・アンド・ワールドレポート』（Allman 1990）、『アトランティック・マンスリー』（Wright 1991）など、マスコミにも登場し脚光を浴びている。イリッチ・スヴィティチが提唱するノストラティック大語族は従来の六語族からなる。そのことはすでにうえでのべた。しかし、ノストラティストのあいだで、その構成言語に一致があるわけではない。たとえば、Dolgopolsky (1986) はドラヴィダ語をノストラティック語族から除外しているし、Starostin (1989) はアフロ・アジア語族を除外し、エスキモー・アリュート語をくわえている。さらに Bomhard and Kerns (1994) によるノストラティック語族は印欧語、アフロ・アジア語、ウラル・ユカギール語、エラモ・ドラヴィダ語、アルタイ語、シュメール語からなる。また祖形についても、まだまだ一致した見解はない。とくに、Bomhard and Kerns (1994: 12-19) が指摘するように、モ

スクワ学派とボンハードたちの祖形をめぐる意見のへだたりはかなりある。しかし、Campbell (In press b.: 2) がまとめるところでは、ノストラティック語族は印欧語、ウラル語、ユカギール語、アルタイ語、朝鮮語、日本語からなるというのが最大公約数で、その他については、ノストラティック語族に属さないまでも、ノストラティック語族との系統関係をみとめるというのがノストラティストの立場だという。

筆者はここでノストラティック語族の正当性をうったえるのでも、それぞれの対応語をこまかく検討しようというのでもない。ここでいいたいのは大野教授の主張する『日本語 = タミル語系統論』を包括した語族が提唱されているという事実である。また、その語族証明の核となる対応語彙が提示されているのである。大野教授はそれを無視する手はない。それぞれの対応語と大野教授の提示する対応一覧表をくらべてみてはどうだろうか。

さらに、このノストラティック語族がドラヴィダ語の系統論にあるていど影響をあたえている。筆者はすでに、なんにんかの学者がドラヴィダ語とウラル・アルタイ語の系統関係を指摘していることにふれた。⁽¹⁰⁾ また、第1章で Zvelebilが日本語とドラヴィダ語(タミル語ではない)の類似を「ドラヴィダ語族 = ウラル・アルタイ語族同系説」やノストラティック大語族のわくぐみでかんがえることを提案していることはすでにのべた。メンゲスはかつてドラヴィダ語とアルタイ語の系統関係を提唱したが (Menges 1979)、その後この関係を東ノストラティック語派としてろんじている (Menges 1992: 62)。もちろん、ノストラティック語族が印欧語とおなじ程度に証明され、歴史・比較言語学者のコンセンサスがえられるかどうかはまだまだ時間が必要であることはまちがいない。⁽¹¹⁾ しかし、このノストラティック大語族の影響は無視できないところまで来たことだけはたしかなようだ。大野教授もぜひこの現実を理解してほしいものである。

ノストラティック語族についてはこれぐらいにして、こんどは従来の比較方法をこえようとするところを紹介したい。それは類型論にもとづく。すでに、日本語の系統について、松本 (1994) が類型論的特徴をあげてろんじている。またそうした立場から、大野教授の説に反論している (松本1995)。しかし、筆者はその論争に参加しようというのではない。もうすこし一般化したジョハンナ・ニコルズの説を紹介したい。

ニコルズによると、従来の比較方法はせいぜい8000年前⁽¹²⁾にさかのぼる程度で、それ以前をあつかうことができないという (Nichols 1992: 2)。しかし、比較的安定した構造的特徴をみることによって、もっと時間をさかのぼることができる指摘する。その比較的安定した構造的特徴とはつぎのような特徴である (Nichols 1992, chapter 5, 1995)。head/dependent marking、句構造 (Structure of phrases)、動詞の一致 (Verb agreement)、Alignment、えらばれた形態論的範疇または類 (Selected morphological categories or classes)、他動性の状態や態と関連する特性 (Properties related to voice and the status of transitivity)、地域的とみなしうる特徴: 語順や音韻体系の諸特徴 (Features presumed to be areal: word order and features of phonological systems)。このうち、head/dependent marking はあとでくわしくのべるとして、いくつか説明をくわえておこう。

まず、句構造とは具体的には前置詞をつかうか、後置詞をつかうか、また所有をどのよう

にあらわすかといった句の構造をいう。動詞の一致は主語と動詞、目的語と動詞の照応関係をさす。Alignment とは自動詞節と他動詞節における名詞項の標識のしかたをいう。具体的には、対格、能格、動作格 - 状態格、中和などをさす。⁽¹³⁾ えらばれた形態論的範疇または類とは、具体的には抱合的／排他的対立、文法性（名詞類）、数詞類別詞、単数／複数の四つをあげている。このうち、抱合的／排他的対立というのは一人称複数において、話し手をふくむ（抱合的）か、ふくまないか（排他的）による対立をさす。⁽¹⁴⁾ 他動性の状態や態と関連する特性とは、動作主をとりさったり、あらたにつけくわえたりする、受動や使役のことをさす。さいごの地域特徴は、具体的には語順とか、声調（トーン）などをさす。

うえであげた構造的特徴のうち、head/dependent marking はニコルズの独創的な規準である。主要部標示と従属部標示と訳されて、『言語学大辞典』に説明があるので、その説明を引用しておこう。Nichols (1986) によると、主要部と従属部をつぎのようにわかる。（下表は言語学大辞典第6巻695頁からの引用）

	主要部 (Head)	従属部 (Dependent)
句レベル	被所有物 被修飾語 付置詞、前／後置詞	所有者 修飾語 付置詞の目的語
節レベル	述語 助動詞	名詞項および付加詞 語彙的動詞、あるいは本動詞
文レベル	主節述語	従属節述語

そして、「主語や目的語の名詞では数や格を標示せず、動詞のみでそれらを標示する場合のように、主要部に標示が偏るタイプを主要部標示型 (head-marking) とよぶ。——中略——。逆に、主語や目的語の名詞のみが数や格を標示し、動詞には数や格標示がない場合のように、従属部に標示が偏るタイプを、従属部標示型 (dependent-marking) とよぶ」(言語学大辞典6:695頁)。この主要部標示型と従属部標示型は歴史的に変化をうけにくく、安定した特徴であるとの主張は遠隔系統論に比較的批判的に論を展開する Campbell (In preparation a: 12) もほかの特徴よりも、可能性がたかいとみとめている。

ニコルズはこうした特徴を世界の言語について調査し、比較的に安定的な特徴が言語の歴史の解明に役立つことをしめした。類型論的特徴のうち、語順についてはすでにおおくの研究がある。⁽¹⁵⁾ しかし、これまであまりとりあげられなかった統語論レベルでの類型論的特徴を世界規模でしらべ、しかも系統論とむすびつけた研究者として、ニコルズの評価はたかい。⁽¹⁶⁾ もちろん、こうした特徴が比較的安定し、変化しにくいかどうかはまだまだ議論の余地がある。⁽¹⁷⁾ しかし、従来音韻対応をおもな武器として系統論がろんじつづけられてきたことをおもうと、画期的なことだといわざるをえない。形態論レベルや統語論レベルの類型論的特徴が系統論の道具となるかどうか、こんごの研究動向に注目したい。

以上、遠隔系統論として、二つの研究を紹介した。ノストラティック大語族の対応語彙と

「日本語＝タミル語対応語彙」を比較したり、日本語とタミル語の類型論的特徴をいちいちとりあげたりしてこなかった。というのは、そうすると、こうした理論が存在することがぼけてしまうおそれがある。また、不用意にこうした表を作成すると、筆者のまちがいがばかりがめにつき、あたらしい理論の紹介がまとはずれのものになりかねない。こうした理論をまなび、よりおおくの言語学者にうけいられる日本語系統論をうちたててほしいし、将来、筆者が日本語の系統論にとりくむ機会があれば、歴史・比較言語学の最新の成果をとりいれたらうと、提示したいとかがえている。

ところで、これら遠隔系統論はおもに言語学の範囲でろんじられてきた。しかし、この遠隔系統論があるていど注目をあびるようになったのは、つぎにのべる考古学や遺伝学の成果をとりいれた多角比較が提唱されたことと密接に関係がある。また近年、従来の歴史・比較言語学研究がある意味でおおきな壁にぶつかっていたともいえる。つまり、今世紀の初頭に発見されて印欧語族を不動のものとしたヒッタイト語やトカラ語のようなあたらしい発見や解釈がないことには、あらたに系統関係をうちたてることができなくなったのである。こうした背景があって、遠隔系統論や多角比較による研究がうみだされたのはまちがいならう。これらがまだまだ万人にみとめられたとはいいがたい。しかし、ここでぜひ紹介したかったのは、なんともいうように「日本語＝タミル語同系説」とふかくかわる方法論を提示しているからである。ぜひこれらの研究に大野教授も目をむけていただきたい。

5. 多角比較

多角比較 (multilateral comparison) とは言語の系統をかながえるさいに、言語学以外の成果を積極的にとりいれる方法論である。多量比較 (mass-comparison) ともメガロ比較 (megalo-comparison) ともいわれる。具体的には、グリーンバーグがおこなった「アメリカ・インディアン諸語」の分類にもちいられた方法論をいう。グリーンバーグは「アメリカ・インディアン諸語」をつぎの三つに分類する。アメリンド語族、ナ・デネ語族、アリュート・エスキモー語族。そして、この分類は言語学的にも、齒列の構造分析研究や遺伝学の成果とも一致するとして、提案したのである (Greenberg 1987a, b, Greenberg, Turner II, and Zegura 1986)。

このグリーンバーグの研究はおおきな反響をよんだ。とくに、自然科学者のあいだでの反響はおおきく、遺伝学者の Cavalli-Sforza たちは人間の進化の研究に遺伝学、考古学、言語学のデータを積極的に利用することに賛成を表明した (Cavalli-Sforza, Piazza, Menozzi and Mountain 1988)。このグリーンバーグの研究方法は自然科学者のあとおしもあって、*Science* (Lewin 1988, Morell 1990), *Nature* (Diamond 1988, 1990), *Scientific American* (Greenberg & Ruhlen 1992) などにもとりあげられ、日本でも『科学』(Lewin 1992) が紹介している。こうした科学誌に言語学の研究が掲載されることはほとんどない。これはグリーンバーグの研究がいかにはかの分野の研究者に衝撃をあたえたか、そのインパクトのおおきさをしめしているといえよう。

ところが、言語学者はおおむねグリーンバーグの方法論に反対している (Chafe 1987, God-

dard 1987, Campbell 1988, Adelaar 1989, Matisoff 1990, Rankin 1992, など)。ただし、グリーンバーグの所属するスタンフォード大学のグループは、のちののべるように、この方法論をさらに拡大し単一言語発生説をかかげ、世界祖語までうちたてている (Ruhlen 1994a, b)。では、言語学者はなぜ反対するのだろうか。それはグリーンバーグが主張する方法論が従来歴史・比較言語学者が習得してきた比較方法を完全に無視しているためである。

グリーンバーグは二つ以上の言語が系統関係をもつかどうかという問題のたて方をとらない。そのかわり、言語はいかに系統的に分類されるかを問う。そして、その分類は多角比較によっておこなわれる。多角比較とはそれぞれのグループの自然な階層を発見するためにおこなわれ、基礎語彙や文法標識について、多数の言語を同時にみることであきらかになり、その分類は基本的にほかの方法による歴史的な分類と同様であるという。ほかの方法とは生物学的な分類や出自と対応する系図、文字体系の分類などをさす (Greenberg 1987b: 648)。こうして、遺伝学などとの共同研究がなりたつというわけである。

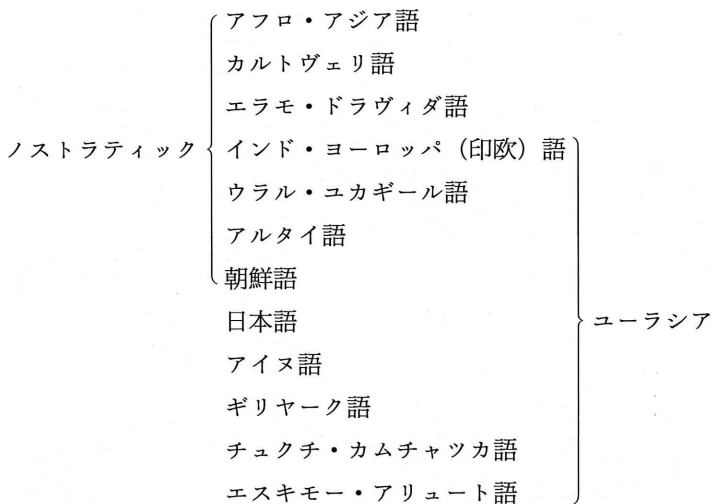
グリーンバーグの方法はかなり乱暴な印象をうけるが、それは厳密な音韻対応といった伝統的な比較方法を無視しているからである。そのぶん、遺伝学など、ほかの分野での分類法を導入し、自分の言語学的分類の正当性を主張する。しかし、言語学者はほかの分類にうつるまえに、その言語学による系統関係の証拠というレベルで、異議をとなえている。グリーンバーグの方法論がいかに問題がおおいか、キャンベルは日本語の系統論とからめたかたちで、つぎのような議論を展開している。それは、グリーンバーグの方法論をもちいれば、実際にはほとんど系統関係を想定できない日本語とアメリンド諸語が系統関係をもつといえる、と皮肉をこめてのべている (Campbell 1997: 8)。

このグリーンバーグの方法論をさらにおしすすめて、世界にあてはめた研究が登場する。その世界単一言語発生説を展開しているのはルーレンである。ルーレンはつぎのような世界中の言語分類をおこなっている (Ruhlen 1994a: 29)。

1. コイサン語族
2. ニジュール・コルドファン語族
 - a. コルドファン語派
 - b. ニジュール・コンゴ語派
3. ナイロ・サハラ語族
4. オーストラリア語族
5. インド・パンフィック語族
6. オーストリック語族
 - a. オーストロアジア語派
 - b. ミャオ・ヤオ語派
 - c. タイ語派
 - d. オーストロネシア語派
7. デネ・コーカサス語族

- a. バスク語派
 - b. コーカサス語派
 - c. ブルシャスキー語派
 - d. ナハリー語派
 - e. シナ・チベット語派
 - f. イェニセイ語派
 - g. ナ・デネ語派
8. アフロ・アジア語族
9. カルトヴェリ語族
10. ドラヴィダ語族
11. ユーラシア語族
- a. 印欧語派
 - b. ウラル・ユカギール語派
 - c. アルタイ語派
 - d. 朝鮮語・日本語・アイヌ語派
 - e. ギリヤーク語派
 - f. チュクチ・カムチャツカ語派
 - g. エスキモー・アリュート語派
12. アメリンド語族

また、この分類とノストラティックが矛盾しないものべて、つぎのような図でしめしている (Ruhlen 1994a: 20)。



こうした世界の言語の分類は遺伝学の分類と一致していることを図 (Ruhlen 1994a: 33)

でしめしている。しかしながら、ここであげたオーストロアジアとオーストロネシアの系統関係ですら、まだ証明されたわけではない。まして、デネ・コーカサスがはたして語族をなすのか、疑問をもつの方がはるかに多い。しかし、こうした解決できない疑問点をのこしながらも、まったくあたらしい言語分類がしめされたことはそれなりに意味があるようにおもう。なお、ルーレンの本の巻末には27語の地球語源 (Global etymologies) が掲載されている (Bengtson & Rulen 1994)。もちろん、この対応語彙表のなかには日本語もあれば、タミル語もある。

こうしたグリーンバーグやルーレンの研究が言語学者にうけいられるかどうかは微妙だ。しかし、言語学者のおおきな反発をうけながらも、遺伝学者たちや考古学者のなかにある程度の賛同者がいることもまた事実である。⁽¹⁸⁾ルーレンは自然人類学者のまねきで日本で講演をおこなっている。日本では言語学者のあいだよりも自然人類学者のあいだでよく知られている。⁽¹⁹⁾言語学者とほかの自然科学者とのあいだの溝はまだまだふかい。⁽²⁰⁾しかし、こうした研究がうえの言語学における遠隔系統論と連動し、一九世紀にはじまった比較方法を根元からみなおすような方法論が言語学者にうけいられる日がこないともかぎらない。こうした動向も、批判的な目をもちながら、みまもっていきたい。

6. おわりに

ある言語学者から、つぎのような内容のお手紙をいただいた。「大野教授との論争はいい加減にやめなさい。否定の証明は難しいし、否定の証明に成功してもプラスにはならない。働き盛りの研究者がかかざりあうことではありません。もっとやらなければならない大事なことがたくさんあるではありませんか」と。この方のおっしゃることはよくわかる。しかし、あえて大野教授の反論に一言口をはさみたかったのは、大野教授に直接再反論することが主目的ではなく、歴史・比較言語学がいまあたらしくうごきはじめたことを紹介したかったからにすぎない。

大野教授はわれわれに つぎのようなことを平気でおっしゃる。「この方々は日本語の比較言語学に必要な、古代日本語の音韻について御存じない——ないといっちは失礼とすれば——極めて少ない知識をお持ちであるな。これでは話は分からないなと」(237頁)。知識の大小をあげて、自分の優越性をここまで露骨におかきになる。ほとんど、こどものけんかである。これでは、大野教授との論争は意味がないとおもわずにはいられない。たいていの場合、大野教授にはまちがいがなく、われわれのみに非があるし、われわれはすべてにおいて大野教授よりもおとろのだ。どこかの誤謬なき政党や現人神をおもいださずにはいられない。

基本的な態度はいくらいってもしかたがない。そこで、もうすこし具体的なことをのべておこう。筆者は前回、すでに指摘した DEDR にかいていない意味以外に、大野教授が提示する対応表の疑問点をあげた。そのうち、方言を使用した例については、回答をいただいた。それによると、方言にも対応語がある以上、みとめるべきだという主張をくりかえすだけである。比較言語学における方言のあつかいにはふれず、なんらかみあわない。また、筆者のあげた疑問点のうち、重複がおおい点やタミル語以外のドラヴィダ語を使用している例につ

いてはまったくふれられていない。われわれの反論を否定するだけで、あなたの指摘することはもっともですといった回答はまったくくない。じつは、大野教授はこうした態度を一貫してとりつづけている。さいしょの『日本語の成立』以来、反論をうけるたびに、大野教授は自説をなんども変更してきた⁽²¹⁾。しかし、筆者のしるかぎりではその変更した理由についてはいっさいしらされていない。

筆者の役割はこれでおしまいにしようとおもう。大野教授がここでしめた言語学の最新の成果をとりいれるのかどうかはわからない。しかし、これ以上、大野教授のアンフェアな誤謬のない反論がつづいたとしても、再反論しないつもりだ。それにいちいち反論しても、ほとんど生産的ではない。また、あげあしとりにかかわりあっているほど、筆者はひまではない。くだんの言語学者の忠告にしたがって、もうすこし自分のやるべき仕事をしなくてはならない。

小論は大野説への最後のコメントとして、たんなるあげあしとりはやめて、生産的な提言をしたつもりである。誤読やおもいちがいなどによって、事実関係にあやまりがあるかもしれないが、その点についてはすなおな気持ちで訂正していきたいとおもう。

注

- (1) 大野 (1994b) はつぎのようにのべて、考古学者を批判している。

「今や、考古学は比較言語学の結果に目を配らなくてはならないはずである。さもなくて、発掘物に対する愛着と固着に執するなら、考古学はそれが本来歴史学の一方法、一分野なのだという正当な立場を見失い、単なる『物マニヤ』に落ち込むことになるだろう」(84頁)

- (2) Hall (1960) は Pulgram (1959) に対する反論の形で展開している。

- (3) ここにあげたのは最近一〇年に出版された英文著作・論文である。日本語の論文では、日本語の系統論にも積極的に発言していた、言語学プロパー唯一の文化勲章受章者である故服部四郎教授が二〇年以上前にすでにこう指摘している。

「祖形は単なる音韻対応関係を記号で表すものに過ぎず、音声実質とは関係がない、というような考え方があるが、採らない。それとは逆に、すべての同系語への変化を無理なく説明できる音は何であるかを、常に考慮に入れながら、祖形を立てるべきである」(服部1971: 12)

- (4) たとえば、印欧祖語にはつぎのような祖形がたてられている。*k^wh, *g^wh。これらは無声有気両唇硬口蓋音と有声有気両唇硬口蓋音をさし、発音可能である。

- (5) イェスベルセンは*印がついた祖形についてつぎのようにのべている。

「仮想的・星印つきの形式は控え目に用うべきこと、かつ最大に用心をして用うべきこと」(イェスベルセン1981: 162)。つまり、祖形をもちいるなどはのべていない。

- (6) この4章・5章執筆にあたっては、第三回オーストラリア言語学講習会におけるキャンベル教授の「言語の系統関係の示し方」と題する講義を参照した。また、その講義のテキストとして配布された参考文献集にはキャンベル教授の未刊行論文が掲載されていたが、その論文(Campbell In press a, b, In preparation)もおおいに利用した。なお、第三回オーストラリア言語学講習会についての報告は別稿(長田1997)を参照。

- (7) 「ノストラティック語族」については本論であげた文献以外につきの論文を参照した。Kaiser and Shevoroshkin (1988), Shevoroshkin and Manaster-Ramer (1991), Manaster-Ramer (1993). なお、「ノストラティック語族」にかんする日本語の論文として、佐藤 (1994) がある。
- (8) イリッチ・スヴィティチは三二歳の若さで交通事故で死亡した。かれの業績等については Bulatova (1989) を参照。
- (9) たとえば、「ノストラティック語源辞典」第一巻が出版されたときには Poppe (1973), Pisani (1972) などウラル・アルタイ学者が書評しただけで、しかもそれらは英語以外の言語でかかれていた。英語でかかれた唯一の書評はこう結論づけている。
 'One is inevitable driven to the conclusion that it cannot be valid' (Clouston 1973: 55)
- (10) 長田 (1996: 175) の注3を参照。そのときまだ出版されていなかった論文として、Vacek (1996) がある。これはこれまでの Vacek の研究をまとめたものである。
- (11) このノストラティックに対し、Doerfer (1995) は強硬に反対している。
- (12) Nichols (1995: 337) は10,000年としている。こうした一貫性のなさを Campbell (In preparation: 13) は批判している。
- (13) Alignment は関係文法からのタームで、まだ定訳はない。ここで対格、能格、動作格-状態格、中和というタームを説明しておこう。Nichols (1992: 65) はこの説明のために、Dixon (1979, 1994) のタームをもちいる。Dixon によると、自動詞の主語を S とし、他動詞の主語を A、目的語を O とする。S と A がおなじ格標識される場合、O を対格とよび、S と O がおなじ格標識される場合、A を能格とよぶ。また、北米諸語のなかには、S が動作動詞か状態動詞かによって、異なった格標識をとるケースがある。それを、S₁ と S₂ とすると、S₁ は A とおなじ格標識をもちい、S₂ は O とおなじ格標識をもちいる。Dixon はこれを Split-S とよぶ。しかし、Nichols はそれらを動作格-状態格 (active-stative) とよぶ。さらに、S, A, O がおなじ格標識をもちいるケースを中和 (Neutral) とよぶ。なお、動作格については、Mithun (1991) がくわしい。
- (14) 具体的な例として、筆者が専門とするムンダ語をあげておこう。ムンダ語では一人称に単数・双数・複数があり、双数と複数にはそれぞれ *alang/aling*, *abu/ale* の二形ある。*alang* は「わたしとあなた」をさし、*aling* は「わたしと彼 (または彼女)」をさす。また、*abu* は「わたしとあなたたち」をさし、*ale* は「わたしと彼たち (あるいは彼女たち)」をさす。この二形のうち聞き手をふくむ前者を包括形とよび、聞き手をふくまない後者を排除形とよぶ。
- (15) 語順の研究は Greenberg (1963) 以後、類型論や普遍性の研究の中心となった観がある。以下の研究を参照。Steele (1978), Hawkins (1983), Tomlin (1986), Siewierska (1988), Dryer (1992), Siewierska & Bakker (1996) など。また、日本人による以下の研究も参照。松本 (1987, 1988)、角田 (1991)、山本 (1993) など。
- (16) ニコルズの評価がたかいという根拠は、1996年、筆者がオーストラリアに滞在したときの経験にもとづく。
- (17) たとえば、ニコルズは Alignment type と語順タイプの相関性を否定しているが、それについて、Siewierska (1996) は反論を提示している。全体的な批判については Campbell (In preparation) を参照。

- (18) たとえば、Barbuji & Sokal (1990), Cavalli-Sforza (1991) など。
- (19) たとえば、モンゴロイド・プロジェクトのニュースレターに投稿したり (Ruhlen 1990)、日本人類学会の学会誌に投稿している (Ruhlen 1995)。また、この学会誌には、Ruhlen (1994b) についても、好意的な書評が掲載されている (Fleming 1995)。さらに、グリーンバーグとルーレンの研究は遺伝学者斉藤 (1995: 161-172) が紹介し、グリーンバーグの「『大量比較』法は合理的なものに感じる」(172頁) と一定の評価をあたえている。
- (20) たとえば、Bateman et al. (1990) はある程度の共同作業の可能性は評価するものの、どちらかというと慎重派である。また、言語学者がこぞってグリーンバーグに反対しているのにくわえて、言語学者以外にも反対者がいることはわすれてはならない。言語学者以外の反対、または慎重論については Barton & Jones (1990), Ringe (1992, 1993), McMahon & McMahon (1995), Gibbons (1996)などを参照。
- (21) たとえば、大野 (1981: 243) によると、原タミル語が日本に広がった後、アルタイ語系統の一言語が朝鮮半島を通して日本の支配層の言語として、金属器、稲作、高度の織機をもってはいつてきたとのべるが、現在はアルタイ語についてはいっさい言及していない。

参考文献

- Adelaar, Willem F. H. (1989) 'Review of Greenberg (1987a)', *Lingua* 78: 249-255.
- Allman, William F. (1990) 'The mother tongue', *U. S. News & World Report* Nov. 5: 60-70.
- Antilla, R. (1989) *Historical and comparative linguistics*. 2nd Edition. John Benjamin, Amsterdam.
- Barbujani, G. and Robert R. Sokal (1990) 'Zones of sharp genetic change in Europe are also linguistic boundaries', *Proceedings of the National Academy of Science* 87: 1816-1819.
- Barton, N. H. and J. S. Jones (1990) 'The language of the genes', *Nature* 346: 415-416.
- Bateman, R., I. Goddard, R. O'Grady, V. A. Funk, R. Mooi, W. J. Kress and P. Cannell (1990) 'Speaking of forked tongues: The feasibility of reconciling human phylogeny and the history of language', *Current Anthropology* 31 (1): 1-24.
- Bengtson, J. D. and Merritt Ruhlen (1994) 'Global etymologies', In: M. Ruhlen (1994a) 277-336.
- Bomhard, Allan R. (1984) *Toward Proto-Nostratic: A new beginning in the reconstruction of Proto-Indo-European and Proto-Afro-Asiatic*. John Benjamin, Amsterdam.
- Bomhard, Allan R. and John C. Kerns (1994) *The Nostratic macrofamily: A study in distance linguistic relationship*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Bright, William ed. (1992) *International Encyclopedia of Linguistics*. 4 Volumes. Oxford University Press, Oxford.
- Bulatova, R. V. (1989) 'Illič-Svityč: A biographical sketch', In: Shevoroshkin ed. 14-28.
- Bussmann, Hadumud ed. Trauch & Kazzari tr. (1996) *Routledge dictionary of language and linguistics*. German edition in 1990. Routledge, New York.
- Campbell, Lyle (1988) 'Review of Greenberg (1987a)', *Language* 64: 591-615.
- Campbell, Lyle (1997) 'Genetic classification, typology, areal linguistics, language endanger-

- ment, and languages of the North Pacific Rim', Miyaoka Osahito ed. *Languages of the North Pacific Rim II*. 179-242 Kyoto University, Kyoto.
- Campbell, Lyle (In press a.) 'How to show languages are related: Methods for distant genetic relationship', In: Richard D. Janda and Brian D. Joseph ed. *Handbook of historical linguistics*. Blackwell.
- Campbell, Lyle (In press b.) 'Nostratic: A personal assessment', Brian D. Joseph and Joe Salmons ed. *Nostratic: Evidence and status*. John Benjamin, Amsterdam.
- Campbell, Lyle and William Poser. (In preparation) *How to show that languages are related: History and practice*.
- Cavalli-Sforza, L. L. (1991) 'Genes, peoples and languages', *Scientific American* 265: 104-110.
- Cavalli-Sforza, L. L., A. Piazza, P. Menozzi, and J. Mountain (1988) 'Reconstruction of human evolution: Bringing together genetic, archaeological, and linguistic data', *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 85 (16): 6002-6006.
- Chafe, Wallace (1987) 'Review of Greenberg (1987a)', *Current Anthropology* 28: 652-653.
- Clauson, Gerard (1973) 'Nostratic', *Journal of the Royal Asiatic Society* 43-55.
- Diamond, Jared M. (1988) 'Genes and the tower of Babel', *Nature* 336: 622-623.
- Diamond, Jared M. (1990) 'The talk of the Americas', *Nature* 344: 589-590.
- Diamond, Jared M. (1993) 'Mathematics in linguistics', *Nature* 366: 19-20.
- Dixon, Robert M. W. (1979) 'Ergativity', *Language* 55: 59-138.
- Dixon, Robert M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Doerfer, G. (1995) 'The recent development of Nostratism', *Indogermanische Forschungen* 100: 252-267.
- Dolgopolsky (1986) 'A probabilistic hypothesis concerning the oldest relationships among the language families of northern Eurasia', Shevoroshkin and T. L. Markey ed. 27-50.
- Dryer, Matthew S. (1992) 'The Greenbergian word order correlations', *Language* 68 (1): 81-138.
- Emeneau, M. B. and Thomas Burrow (1984) *Dravidian etymological dictionary. Revised Edition (=DEDR)*. Clarendon Press, Oxford.
- Fleming, Harold C. (1995) 'Review of Ruhlen (1994b)', *Anthropological Science* 103 (2): 141-153.
- Fox, Anthony (1995) *Linguistic reconstruction: An introduction to theory and method*. Oxford University Press, Oxford.
- Gibbons, Ann (1996) 'The peopling of the Americas', *Science* 274: 31-33.
- Goddard, Ives (1987) 'Review of Greenberg (1987a)', *Current Anthropology* 28 (5): 656-657.
- Greenberg, Joseph H. (1963) 'Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements', J. H. Greenberg ed. *Universals of Language*. 58-90. MIT Press, Cambridge.

- Greenberg, Joseph H. (1987a) *Language in the Americas*. Stanford University Press, Stanford.
- Greenberg, Joseph H. (1987b) 'Aithos's précis', *Current Anthropology* 28 (5): 647-652.
- Greenberg, Joseph H. (1996) 'The "Greenberg Hypothesis"', *Science* 274: 1447
- Greenberg, Joseph H. and M. Ruhlen (1992) 'Linguistic origins of Native American', *Scientific American* November: 60-65.
- Greenberg, Joseph H., Christy G. Turner II, and Stephen L. Zegura (1986) 'The settlement of the Americas: A comparison of the linguistic, dental, and genetic evidence', *Current Anthropology* 27 (5): 477-497.
- Hall, Robert (1960) 'On realism in reconstruction', *Language* 36: 203-206.
- 服部 四郎 (1971) 「比較方法」、服部四郎編『言語の系統と歴史』。岩波書店。1-22頁。
- Hawkins, John A. (1983) *Word order universals*. Academic Press, New York.
- Hock, Hans Henrich (1986) *Principles of historical linguistics*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Hock, Hans Henrich and Brian D. Joseph (1996) *Language history, language change, and language relationship: An introduction to historical and comparative linguistics*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Illič-Svityč, V. M. (1971, 1976, 1984) *Opyt sravnenija nostratičeskix jazykov*. Moscow.
- イエスベルセン、オットー。三宅鴻訳 (1981 [1922]) 『言語 — その本質・発達・起源 (上)』。岩波文庫。
- Kaiser, M. and V. Shevoroshkin (1988) 'Nostratic', *Annual Review of Anthropology*. 17: 309-329.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1986-1995) 『言語学大辞典』三省堂。
- Koerner, E. F. K. (1989) 'Comments on reconstructions in historical linguistics', In: Vennemann ed. *The new sound of Indo-European: Essays in phonological reconstruction*. 3-15. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Lamb, S. M. and E. D. Mitchell eds. (1991) *Sprung from some common source: Investigations into the prehistory of languages*. Stanford University Press, Stanford.
- Lass, R. (1993) 'How real(ist) are reconstructions?', C. Jones ed. *Historical linguistics: Problems and perspectives*. 156-189. Longman, London.
- Lewin, Roger (1988) 'American language dispute', *Science* 242: 1632-1633.
- Lewin, Roger. 大貫昌子訳。(1992) 「最初のアメリカ人」、『科学』62(4): 205-208。
- McMahon, A. M. S. and R. McMahon (1995) 'Linguistics, genetics and archaeology: Internal and external evidence in the Amerind controversy', *Transactions of the Philological Society* 93 (2): 125-225.
- Manaster-Ramer, Alexis (1993) 'On Illič-Svityč's Nostratic theory', *Studies in Language* 17: 205-250.
- Matisoff, James A. (1990) 'On megalocomparison', *Language* 66 (1): 106-120.
- 松本 克己 (1987) 「語順のタイプとその地理的分布 — 語順の類型論的研究: その1 —」、『文藝言語研究: 言語篇』12: 1-114。

- 松本 克己 (1988) 「語順のタイプと線状化の原理 — 語順の類型論的研究：その 2 —」、『文藝言語研究：言語篇』15：1-67。
- 松本 克己 (1994) 「日本語系統論の見直し — マクロの歴史言語学からの提言」、『月刊日本語論』2(11)：36-51。
- 松本 克己 (1995) 「日本語・タミル語同系説に対する言語学的検証 — 大野晋氏へのお答えにかえて」、『国文学解釈と鑑賞』60(5)：192-185。
- メイユ、アントワーズ。泉井久之助訳。(1977 [1925]) 『史的言語学における比較の方法』。みすず書房。
- Menges, Karl H. (1977) 'Dravidian and Altaic', *Anthropos* 72: 129-179.
- Menges, Karl H. (1992) 'East Nostratic', In: Shevoroshkin ed. 59-62.
- Mithun, Marianne (1991) 'Active/agentive marking and its motivations', *Language* 67 (3): 510-546.
- Morell, Virginia (1990) 'Confusion in earliest America', *Science* 249: 439-441.
- Nichols, Johanna (1986) 'Head-marking and dependent-marking grammar', *Language* 62 (1): 56-119.
- Nichols, Johanna (1992) *Linguistic diversity in time and space*. University Press of Chicago, Chicago.
- Nichols, Johanna (1995) 'Diachronically stable structural features', H. Andersen ed. *Historical Linguistics 1993*. 337-355. John Benjamin, Amsterdam.
- 大野 晋 (1980) 『日本語の世界 1：日本語の成立』。中央公論社。
- 大野 晋 (1981) 『日本語とタミル語』。新潮社。
- 大野 晋 (1994a) 『新版 日本語の起源』。岩波新書。
- 大野 晋 (1994b) 「日本語の起源について」、『日本語論』2(11)：68-84。
- 大野 晋 (1996) 「『タミル語＝日本語同系説に対する批判』を検証する」、『日本研究』第15集：248-186。
- 長田 俊樹 (1996) 「序：『日本語＝タミル語同系説』を検証する—大野晋『日本語の起源 新版』をめぐる」、『日本研究』第13集：248-243。
- 長田 俊樹 (1997) 「第三回オーストラリア言語学講習会とオーストラリア言語学界事情」、『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』90：24-33。
- Pedersen, Holger (1903) 'Turkische Lautgesetze' *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 57: 535-561.
- Pisani, Vittore (1972) 'Review of Illič-Svityč (1971)', *Archivio glottologico italiano* 57: 69-72.
- Poppe, Nicholas (1973) 'Ein vergleichendes Wörterbuch der nostratischen Sprachen', *Finnisch-Ugrische Forschungen* 39: 365-369.
- Pulgram, Ernst (1959) 'Proto-Indo-European reality and reconstruction', *Language* 35: 421-426.
- Rankin, Robert L. (1992) 'Review of Greenberg (1987)', *International Journal of American Linguistics* 58 (3): 324-353.

- Ringe, Donald A. Jr. (1992) 'On the calculating the factor of chance in language comparison', *Transactions of the American Philosophical Society* 82 (1): 1-110.
- Ringe, Donald A. Jr. (1993) 'A reply to Professor Greenberg', *Proceedings of the American Philosophical Society* 137: 91-109.
- Ross, Malcolm and Mark Durie (1996) 'Introduction', In: Mark Durie and Malcolm eds. *The comparative method reviewed: Regularity and irregularity in language change*. 3-38. Oxford University Press, New York.
- Ross, Philip E. (1991) 'Hard words: Trends in linguistics', *Scientific America* April 139-147.
- Ruhlen, Merritt (1990) 'Phylogenetic relations of Native American languages', *Newsletter of the "Prehistoric Mongoloid Dispersals" Project* 7: 75-96.
- Ruhlen, Merritt (1994a) *On the origin of languages: Studies in linguistic taxonomy*. Stanford University, Stanford.
- Ruhlen, Merritt (1994b) *The origin of language: Tracing the evolution of the mother tongue*. John Wiley, New York.
- Ruhlen, Merritt (1995) 'Proto-Amerind numerals', *Anthropological Science* 103 (3): 209-225.
- 斉藤 成也 (1995) 「遺伝子からみたモンゴロイド」、赤澤威 (編) 『モンゴロイドの地球 [1] アフリカからの旅だち』。東京大学出版会。119-184頁。
- 佐藤 規祥 (1994) 「印欧語と他の語族との間の系統論的關係について」、『名古屋大学言語学論集』10: 1-34。
- Shevoroshkin, V. ed. (1989) *Explorations in language macrofamilies*. Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer, Bochum.
- Shevoroshkin, V. ed. (1992) *Reconstructing languages and cultures*. Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer, Bochum.
- Shevoroshkin, V. and A. Manaster-Ramer (1991) 'Some recent work on the remote relations of languages', In: S. M. Lamb & E. D. Mitchell eds. 178-199.
- Shevoroshkin, V. and T. L. Markey eds. (1986) *Typology, relationship and time*. Karoma, Ann Arbor.
- Siewierska, Anna (1988) *Word order rules*. Croom Helm, London.
- Siewierska, Anna (1996) 'Word order type and alignment type', *Sprachtypologie und Universalienforschung* 49 (2): 149-176.
- Siewierska, Anna and Dik Bakker (1996) 'The distribution of subject and object agreement and word order type', *Studies in Language* 20 (1): 115-161.
- Starostin, Sergej (1989) 'Nostratic and Sino-Caucasian', In: Shevoroshkin ed. 42-66.
- Steele, S. (1978) 'Word order variation: a typological study', In: Greenberg, J. H., Charles Ferguson and Edith A. Moravcsik eds. *Universals of human language* 4: 585-623.
- Tomlin, R. (1986) *Basic word order: Functional principles*. Croom Helm, London.
- 角田 太作 (1991) 『世界の言語と日本語』。くろしお出版。
- Vacek, Jaroslav (1996) 'Dravidian and Mongolian: Summary of results', *Archiv Orientální* 64: 31-46.

- Wilford, John Noble (1987) 'Linguist dig deeper into the origins of language', *The New York Times* Nov. 24, 1987.
- Wright, Robert (1991) 'Quest for the mother tongue', *The Atlantic Monthly* April: 39-68.
- 山本 秀樹 (1993) 「世界諸言語における語順の地理的分布 —地理的類型論の視点から」、『弘前大学文化紀要』37: 45-71。
- ズヴェレビル、カミル。下宮忠雄訳。(1990) 「再びドラヴィダ語と日本語について」、大野晋・小沢重男・佐々木高明・大林太良・佐原真『シンポジウム 弥生文化と日本語』。角川書店。174-183頁。
- Zvelebil, Kamil V. (1991a) 'Review article: Dravidian and Japanese once again', *Archiv Orientalní* 59: 73-77.
- Zvelebil, Kamil V. (1991b) 'Long-range language comparison in new models of language development: The case of Dravidian', *Pondicherry Institute of Linguistics and Culture Journal of Dravidic Studies* 1 (1): 21-31.

(付録)

1980年以降の欧文による日本語系統論文献リスト

大野教授がタミール語(当時の表記のまま)と日本語の系統関係をはじめてあきらかにした『日本語の世界』(中央公論社刊)は1980年に出版された。そして、おなじ年に Roy Andrew Miller: *Origins of the Japanese Language* が出版された。大野教授の影響か、ミラー教授の影響かはわからないが、1980年以後、欧文(とりわけ英文)による日本語系統論についての論文がずいぶんふえた。しかし、これまであまり紹介されることはなかった。それがこの文献リストをまとめる第一の理由である。

また、これまでの日本語系統論についての本や論文をみると、ふるい時代の欧文でかかれた文献にはたいていふれられている。しかし、あたらしいものについてはあまり言及されることがない。それがこれを作成したもうひとつの理由である。

この文献リストには日本語による文献は省略した。それらについてはつぎの論文や本をみていただきたい。

- 池田次郎・大野晋編(1973)『論集 日本文化の起源 5 日本人種論・言語学』。平凡社。(文献目録630-642頁)
- 福田昆之(1975)『日本語の系統論的研究』。(文献目録27-49頁) FLL。
- 大野晋・柴田武編(1978)『岩波講座日本語12 日本語の系統と歴史』。岩波書店。
- 崎山理編(1990)『日本語の形成』。三省堂。(著作・論文目録407-433頁)
- 安本美典(1994)「文献目録 日本語の起源」、『日本語論』2(1): 27-35。

うえてとりあげたのは文献目録をふくんだものと文献が豊富なものをえらんだ。生前日本語系統論にとりこんできた故村山七郎教授の一連の本をうえの文献からのぞいた。それはとくに文献

目録だけをとりあげたものがないという理由による。村山教授の著作のさいごには参考文献がついていて、それらも役にたつ。

なお、本論であげた参考文献はのぞいた。したがって、日本語とドラヴィダ語の系統関係についての論文はあげていない。この文献にかたよりのあるかもしれないが、アルタイ語や朝鮮語などとの系統関係を想定した北方説に筆者が荷担している訳ではない。また、この文献リストはあくまでも筆者が把握している著作・論文だけを掲載した。そのさい、Linguistic Bibliography for the Year 1980-1993 (Kluwer Academic Publisher) を参照した。もっと網羅的な文献リストにするために、みなさまからご教示いただければさいわいである。

謝辞：この文献リスト作成にあたって、ハワイ大学のヴォヴィン博士と九州大学言語文化部の板橋義三助教授の協力をえた。筆者の問い合わせに、お二人から論文を御恵送いただいた。また、ヴォヴィン博士のロシア語論文には博士自身が英語の訳をつけて下さった。名をあげて、感謝の意を表したい。

- Akiba-Reynolds, Katsue (1984) 'Internal reconstruction of pre-Japanese syntax', In: *Historical syntax*. 1-23 Mouton, The Hague.
- Benedict, Paul K. (1986) 'An anthropologist/psychiatrist looks at Southeast Asian (including Japanese) linguistics', *Linguistics of the Tibet-Burma Area* 9 (2): 71-82.
- Benedict, Paul K. (1990) *Japanese/Austro-Tai*. Karoma, Ann Arbor.
- Chew, John J. (1981) 'The relationship between Japanese, Korean, and the Altaic languages: In what sense genetic?', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 7-38.
- Chew, John J. (1989) 'The significance of geography in understanding the relationship of Japanese to other languages', *Bochmer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 12 (1): 13-49.
- Comrie, Bernard (1993) 'Review of Starostin (1991)', *Language* 69 (4): 828-832.
- Décsy, Gy. (1987) 'Cal-Ugrisch und Jap-Ugrisch', *Ural-Altäische Jahrbücher* 59: 130-132.
- Doi T. (1984) *On the hypothesis of the pidgin-creole origin of the Japanese language*. M. A. Thesis. Southern Illinois University.
- Elbert, Samuel H. (1981) 'Polynesian and Japanese', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 59-72.
- Fujiwara Akira (1981) 'The Japanese-Dravidian vocabulary of Flora and Fauna', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 73-97.
- Hakola, H. P. A. (1989) 'Are the major agglutinative languages genetically related?', *Language Sciences* 11 (4): 367-394.
- Hashimoto Masaru (1990) 'Some remarks on the relationship of Japanese and Korean', In: Sakiyama Osamu and Sato Akihiro eds. *Asian languages and general linguistics* (『アジア諸言語と一般言語学』) 197-202. Sanseido, Tokyo.
- Hattori Shiro (1982) 'Vowel harmonies of the Altaic languages, Korean, and Japanese', *Acta*

- Orientalia Hungarica* 36 : 207-214.
- Hudson, Mark (1994) 'The linguistic prehistory of Japan: some archaeological speculations', *Anthropological Science* 102 (3): 231-255.
- Ikeda Tetsuro (1981) 'On the typological composition of compound verbal forms in Old Japanese', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 99-123.
- Ishii Hiroshi (1992) 'Japanese and Korean/k/-/p/ correspondence', *Linguistic Association of Canada and the United States Forum* 19: 448-456.
- Itabashi Yoshizo (1987) *Altaic evidence for the Japanese and Korean case suffix systems*. University of Washington Ph. D. dissertation.
- Itabashi Yoshizo (1988) 'A comparative study of the Old Japanese accusative case suffix *wo* with the Altaic accusative case suffixes', *Central Asiatic Journal* 32 (3-4): 193-231.
- Itabashi Yoshizo (1989) 'The origin of the Old Japanese prosecutive case suffix *yuri*', *Central Asiatic Journal* 33 (1-2): 47-66.
- Itabashi Yoshizo (1990) 'The origin of the Old Japanese accusative suffix *i*', *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* 9: 152-177.
- Itabashi Yoshizo (1991a) 'The origin of the Old Japanese genitive case suffixes * *n/nö/na/yga* and the Old Korean genitive case suffix * *i* in comparison with Manchu-Tungus, Mongolian and Old Turkic', *Central Asiatic Journal* 35 (3-4): 231-278.
- Itabashi Yoshizo (1991b) 'The origin of the Old Japanese lative case suffix *gari*', *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* 10: 143-158.
- Itabashi Yoshizo (1993a) 'A comparative study of the Old Japanese and Korean nominative case suffixes *i* with the Altaic third person singular pronouns', *Central Asiatic Journal* 37 (1-2): 82-119.
- Itabashi Yoshizo (1993b) 'On the main designations of location and direction in Altaic and in Korean and Japanese', *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* 12: 122-146.
- Itabashi Yoshizo (Forthcoming a) 'A comparative study of the Old Japanese locative case suffix *tu*', *Acta Orientalia Hungarica*.
- Itabashi Yoshizo (Forthcoming b) 'Are the Old Japanese personal pronouns genetically related to those of the Altaic languages?', *Acta Orientalia Hungarica*.
- Janhunen, Juha (1992) 'Das Japanische in vergleichender Sicht', *Journal de la Sociëtë Finno-Ougrienne* 84: 145-161.
- Janhunen, Juha (1994a) 'Additional notes on Japanese and Altaic (1)', *Journal de la Sociëtë Finno-Ougrienne* 85: 236-240.
- Janhunen, Juha (1994b) 'Additional notes on Japanese and Altaic (2)', *Journal de la sociëtë Finno-Ougrienne* 85: 256-260.
- Kawamoto Takao (1981) 'Proto-Oceanic paradigms and Japanese', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 139-155.
- Kazár, Lajos (1980) *Japanese-Uralic language comparison; locating Japanese origins with the*

- help of Samoyed, Finnish, Hungarian, Etc.: An attempt.* Lajos Kazár-Tsurusaki Books, Hamburg.
- Kazár, Lajos (1981a) 'Japanese-Uralic morphological parallels', *Ural-Altäische Jahrbücher* 53: 88-104.
- Kazár, Lajos (1981b) 'Contributions to Japanese-Uralic language comparison with emphasis on etymological studies', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 157-171.
- Kazár, Lajos (1989a) 'Northern inner Asia: Probable one-time home of the Japanese, Uralians and Altaians', *Bochumer Jahrbuch zur Ostasien-forschung* 12 (1): 149-184.
- Kazár, Lajos (1989b) 'Some Japanese-Uralic morphological and lexical parallels considered', *Ural-Altäische Jahrbücher* 61: 27-36.
- Kim, Bang-han (1981) 'The relationship between the Korean and Japanese languages', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 173-184.
- Kiyose N. Gisaburo (1982) 'Labial harmony and the eight vowels in ancient Japanese, from the Altaistic point of view', 『音声学会会報』 171: 1-7.
- Kortlandt, Frederick (1993) 'The origin of the Japanese and Korean accent systems', *Acta Linguistica Hafniensia* 26: 57-65.
- Krippes, Karl (1990) 'A new contribution to Japanese-Korean phonological comparison', *Ural-Altäische Jahrbücher* 62: 138-140.
- Krippes, Karl (1992) 'The genetic relationship between Japanese and Austronesian revisited', *Ural-Altäische Jahrbücher* 64: 117-130.
- Lewin, Bruno (1981) 'Archaic Korean-A component to clarify the origin of Japanese?', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 201-215.
- Lewin, Bruno (1989) 'Herkunft', In: Bruno Lewin ed. *Sprache und schrift Japans.* 98-118. E. J. Brill, Leiden.
- Maher, J. C. (1991) 'Northern Kyushu creol: A hypothesis concerning the multilingual formation of Japanese', *International Christian University Public Lecture Bulletin* 6: 15-48.
- Martin, Samuel E. (1987) *Japanese language through time.* Yale University Press, New Haven.
- Martin, Samuel E. (1990) 'Morphological clues to the relationships of Japanese and Korean', In: Baldi ed. *Linguistic change and reconstruction methodology.* 483-509. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Martin, Samuel E. (1991) 'Recent research on the relationships of Japanese and Korean', In: Lamb & Mitchell eds. *Sprung from some common sources.* 269-292. Stanford University Press, Stanford.
- Martin, Samuel E. (1996) 'On the finite forms of Old Japanese verbs', *Journal of East Asian*

- Linguistics* 5 (3): 295-299.
- Menges, Karl (1985) 'Japanese and Altaic', 馬淵和夫編『日本語の起源』。武蔵野書院。
- Miller, Roy A. (1980) *Origins of the Japanese language*. University of Washington Press, Seattle.
- Miller, Roy A. (1981) 'Altaic origins of the Japanese verb classes', In: Arbeitman & Bomhard eds. *Bono homini donum: Essays in historical linguistics, in memory of J. Alexander Kerns*. 845-880. John Benjamin, Amsterdam.
- Miller, Roy A. (1982) 'Japanese evidence for some Altaic denominal verbstem derivational suffixes', *Acta Orientalia Hungarica* 36: 391-403.
- Miller, Roy A. (1985a) 'Altaic connections of the Old Japanese negatives', *Central Asiatic Journal* 29: 35-84.
- Miller, Roy A. (1985b) 'Externalizing internal rules: Lyman's law in Japanese and Altaic', *Diachronica* 2 (2): 137-165.
- Miller, Roy A. (1985c) 'Homonymy, heteroclysis and history in the Japanese verb', In: Makkai and Melby eds. *Linguistics and philosophy: Essays in honor of Rulon S. Wells*. 393-418. John Benjamin, Amsterdam.
- Miller, Roy A. (1985d) 'Apocope and the problem of Proto-Altaic * *ǰ* (I)', *Ural-Altaiisch Jahrbücher Neue Folge* 5: 187-208.
- Miller, Roy A. (1986a) 'Apocope and the problem of Proto-Altaic * *ǰ* (II)', *Ural-Altaiisch Jahrbücher Neue Folge* 6: 184-207.
- Miller, Roy A. (1986b) 'Altaic evidence for prehistoric incursions of Japan', *Ural-Altaiisch Jahrbücher* 58: 39-64.
- Miller, Roy A. (1986c) 'Linguistic evidence and Japanese prehistory', In: R. Pearson ed. *Windows on the Japanese past*. 101-125. University of Michigan Press, Ann Arbor.
- Miller, Roy A. (1987) 'Proto Altaic * *x*-', *Central Asiatic Journal* 30: 19-63.
- Miller, Roy A. (1989a) 'Old Japanese *i*', *Bochmer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 12 (1): 251-291.
- Miller, Roy A. (1989b) 'Where did Japanese come from?', *Asian & Pacific Quarterly of Cultural and Social Affairs* 21: 1-25.
- Miller, Roy A. (1990) 'Archaeological light on Japanese linguistic origins', *Asian & Pacific Quarterly of Cultural and Social Affairs* 22: 1-26.
- Miller, Roy A. (1991a) 'Genetic connections among the Altaic languages', In: Lamb & Mitchell eds. *Sprung from some common sources*. 293-327. Stanford University Press, Stanford.
- Miller, Roy A. (1991b) 'Japanese and Austronesian', *Archív Orientální* 52: 148-168.
- Miller, Roy A. (1991c) 'Anti-Altaists contra Altaists', *Ural-Altaiisch Jahrbücher* 63: 5-62.
- Miller, Roy A. (1991d) 'How many Verner's laws does an Altaicist need?' In: William G. Boltz and Michael C. Shapiro eds. *Studies in the historical phonology of Asian languages*. 176-204. John Benjamin, Amsterdam.

- Miller, Roy A. (1992-93) 'On some petrified case formations in the Altaic languages', *Acta Orientalia* 46 (2-3): 299-310.
- Miller, Roy A. (1993) 'More on the Old Japanese and Old Korean accusatives', *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* 12: 230-239.
- Miller, Roy A. (1994a) 'Old Turkic *qut*, Japanese (*mi.*) *koto*', *Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft Supplement* 10: 380-390.
- Miller, Roy A. (1994b) 'Old loanwords in Japanese', *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 85: 221-236.
- Miller, Roy A. (1994c) 'On S. A. Starostin's Altajskaja problema i proisxozdenie japonskogo jazyka (The Altaic problem and the origin of the Japanese language)', *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* 13: 63-107.
- Miller, Roy A. (1996) 'Language, linguistics and Japanology', *Acta Orientalia* 57: 116-140.
- Modini, Paul (1985) 'Japanese as a Uralic-Altaic language: the significance of serial verbs', *Journal of the Oriental Society of Australia* 20 & 21: 138-152. (*Archiv Orientalní* 58: 255-265 reprinted in 1990)
- Modini, Paul (1991) 'Locative verbs in Ural-Altaic languages', *Archiv Orientalní* 59: 12-19.
- Modini, Paul (1993a) 'The role of the particle *o* in Old Japanese', *Cahiers Linguistiques d'Ottawa* 22 (1): 49-86.
- Modini, Paul (1993b) 'From theme marker to object marker: the history of Old Japanese *o*', *Cahiers Linguistiques d'Ottawa* 22 (2): 239-251.
- Modini, Paul (1994) 'The Japanese particles and the question of the genetic affiliation of the Japanese language', *Archiv Orientalní* 62: 160-168.
- Murayama Shichiro (1981) 'The language relation between Ryukyu and Taiwan', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 217-227.
- Patrie, James T. (1981) 'A comparative analysis of the numeral systems of Ainu, Korean, and Japanese', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 243-251.
- Peng, Fred C. C. (1985) 'On the possible clusters of *mb*, *nd*, and *ng* in Proto-Japanese', *Papers from the 6th International Conference on Historical Linguistics*. 409-425.
- Rickmeyer, J. (1989) 'Japanisch und der altaische Sprachtyp-eine Synopsis structureller Entsprechungen-', *Bochmer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 12 (1): 313-332.
- Sakiyama Osamu (1996) 'Formation of the Japanese language in connection with Austronesian languages', In: Akazawa Takeru & E. J. E. Szathmary eds. *Prehistoric Mongoloid dispersals*. 349-358. Oxford University Press, Tokyo.
- Serafim, Leon (1994) 'A modification of the Whitman Proto-Koreo-Japonic vocalic hypothesis', *Korean Linguistics* 8: 181-206.
- Sohn Ho-min (1980) 'The state of the art in the historical-comparative studies of Japanese and Korean', *Korean Studies* 4: 29-50.

- Solnit, D. (1992) 'Review of Benedict (1990)', *Language* 68: 186-196.
- Solntsev, Vadim and Nina Solntseva (1995) 'The problem of the ties of Japanese with Austronesian and Austroasiatic languages as an aspect of the Altaic problem', *Proceedings of the 38th Permanent International Altaistic Conference (PIAC)* 359-364. Harrassowitz, Wiesbaden.
- Starostin, S. A. (1991) *Altajskaja problema I proischozdenie japonskogo jazyka*. Nauka, Moskva.
- Starostin, S. A. (Forthcoming) 'On vowel length and prosody in Altaic languages', A. Manaster-Ramer (ed) *Festschrift für Vitaly Shevoroshkin zu seinem 60 Geburtstag*.
- Street, John C. (1980) 'Japanese and the Altaic languages', *Orientalistische Literaturzeitung* 75: 101-105.
- Street, John C. (1981) 'Remarks on the phonological comparison of Japanese with Altaic', *The Bulletin of the International Institute for Linguistic Sciences, Kyoto Sangyo University* 2 (4): 293-307.
- Street, John C. (1985) 'Japanese reflexes of the Proto-Altaic lateral', *Journal of the American Oriental Society* 105: 637-652.
- Syromiatnikov, N. A. (1981) *The ancient Japanese language*. Nauka, Moscow.
- Thornton, Ronald (1995) 'The Nostratic macrofamily hypothesis and the origins of the Japanese language', *Otsuma Review* 28: 97-103
- Unger, J. Marshall (1990a) 'Summary report of the Altaic panel', In: Baldi ed. *Linguistic change and reconstruction methodology*. 479-482. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Unger, J. Marshall (1990b) 'Japanese and what other Altaic languages?', In: Baldi ed. *Linguistic change and reconstruction methodology*. 547-561. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Vance, Timothy (1982) 'On the origin of voicing alteration in Japanese consonants', *Journal of the American Oriental Society* 102: 333-341.
- Vovin, Alexander (1985) 'K voprosu o Konechnoslogovykh v prajaponskom jazyke' [On the question of syllable-final consonants in the Proto-Japanese language], *Iazyki Azii i Afriki: Fonetika, Leksikologija, Grammatika*. Moscow. 21-29.
- Vovin, Alexander (1986a) 'O drevnekoreisko-drevnejaponskikh jazykovykh svjaziakh' [On the Ancient Korean-Old Japanese linguistic connections], *Narody Azii i Afriki* No. 5: 98-102.
- Vovin, Alexander (1986b) 'Nekotorye japonskie etimologii' [Some Japanese etymologies], *Tezisy XXIX sessii PIAC*. Moscow. 31-32.
- Vovin, Alexander (1988a) 'O nekotorykh nazvanijakh serdtsa i pecheni v altaiskikh jazykakh' [On some names for the heart and liver in the Altaic languages], *Tezisy konferentsii aspirantov i molodykh nauchnykh sotrudnikov IV AN SSSR*. Moscow. 57-61.
- Vovin, Alexander (1988b) 'Sravnitel' no-istoricheskoe jazykoznanie poslednikh desjatiletii v Japonii i Koree' [Comparative-historical linguistics in recent decades in Japan and Korea], *Linguisticheskie Traditsii v Stranakh Vostoka*. Moscow. 57-61.

- Vovin, Alexander (1988c) 'K voprosu ob etnogeneze japontsev' [On the question of the ethnogenesis of the Japanese], *Narody Azii i Afriki* 4 : 90-99.
- Vovin, Alexander (1993a) 'Long vowels in Proto-Japanese', *Journal of East Asian Linguistics* 2 : 125-134.
- Vovin, Alexander (1993b) 'Japanese *kisaragi* "second lunar month"', *Ural-Altäische Jahrbücher* 65 : 116.
- Vovin, Alexander (1993c) 'Notes on some Japanese-Korean phonetic correspondences', *Japanese/Korean Linguistics*. Stanford University Press 3 : 338-350.
- Vovin, Alexander (1994a) 'Long-distance relationships, reconstruction methodology, and origins of Japanese', *Diachronica* 6 : 95-114.
- Vovin, Alexander (1994b) 'Is Japanese related to Austronesian?', *Oceanic Linguistics* 33 (2) : 369-390.
- Vovin, Alexander (1994c) 'Genetic affiliation of Japanese and methodology of linguistic comparison', *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 85 : 241-256.
- Vovin, Alexander (1995) 'Once again on the accusative marker in Old Korean', *Diachronica* 7 (2) : 223-236.
- Vovin, Alexander (1997a) 'Japanese rice agriculture terminology and the linguistic affiliation of the Yayoi culture', *Language and Archaeology*.
- Vovin, Alexander (1997b) 'On the origin of register in Japanese', In : Ho-min Sohn and John Haig eds. *Japanese-Korean Linguistics* 6 : 113-133. Center for the Study of Language and Information, Stanford.
- Vovin, Alexander (1997c) 'On the syntactic typology of the Old Japanese', *Journal of East Asian Linguistics*.
- Vovin, Alexander (Forthcoming a) 'Five Japanese etymologies', In : *Festschrift für Vitaly Shevoroshkin zum seine 60 Geburtstag*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Vovin, Alexander (Forthcoming b) 'Nostratic and Altaic', In : Joe Salmons and Brian Joseph eds. *Perspectives on Nostratic*. John Benjamin, Amsterdam.
- Vovin, Alexander and Alexis Manaster-Ramer (1997) 'On the pseudo-problem of the Altaic body part terms', *Zeitschrift Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*.
- Wenck, Gunther (1987) *Pratum japonisticum*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Whitman, John (1985) *The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean*. Ph. D. Dissertation, Harvard University.
- Whitman, John (1990) 'A rule of medial *-r- loss in pre-Old Japanese', In : Baldi ed. *Linguistic change and reconstruction methodology*. 511-545. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Wienold, G. (1989) 'Parallele semantische Strukturen im Japanischen und Koreanischen', *Bochmer Jahrbuch zur Ostasienforschung* 12 (1) : 425-453.
- Yasumoto Biten (1989) 'The origin of the Japanese language with arguments on quantitative methods to compare languages', In : Mizutani Shizuo ed. *Japanese quantitative linguistics*. 236-263. Dr. N. Brockmeyer, Bochum.

Yoshiwara R. (Ahlberg, Roger) (1991) *Sumerian and Japanese : A comparative language study*. Japan English Service, Chiba.